

「諏訪藩に伝わる『鷹書』の翻刻と注解」

『鷹書』大―(九)

代表 堀内 勝*

メンバー

大橋 和 華**

小瀬 園 子***

箕浦 芳 浩****

(五十音順)

Verification, Translation and Notes of
“The Large Book on Falconry”
Transmitted Through the Suwa Fief
(9th Part)

Masaru HORIUCHI *

Waka OHASHI **

Sonoko OSE ***

Yoshihiro MINOURA ****

はつめい

昨年二月十四日、中部大学国際関係学部主催で、「鷹狩の文明誌」シンポジウムが同大学名古屋キャンパスで行われた。オーガ

ナイザーは堀内勝が担当し、①田口洋美氏(狩猟文化研究所代表)「狩猟文化と鷹狩」、②堀内勝「アラブ世界の鷹狩」、③周達生氏(元国立民族学博物館教授)「東アジアの鷹狩」、④中澤克昭氏(国立長野高専助教授)「日本の鷹狩の歴史」、⑤箕浦芳浩氏(吉田流鷹匠)「鷹狩の鷹の種類と狩の特徴」、それぞれ一時間の講演を行った。その後、質疑応答に入ったわけであるが、九十名余りの参加者を得て、その後の懇談会も盛況のうちに終了した。

このシンポジウムの趣旨は三つあった。第一に「鷹狩」をテーマとした研究会は、管見にして今までに無く、「狩猟」をテーマにその事に組み込まれる範囲であった。「鷹狩」の主題は、研究者間においても従来は封建制や支配者の統治との関連でなされていた。今回は鷹狩を主座におき、生態的な側面を強調して、その実態に迫ろうとする点で画期的であった(講演①・⑤)。この強調は同時に環境問題・動物愛護などの最近の趨勢に対して鷹狩の伝統文化の実態を知らしめ、その優れた点を訴えるところにあった。第二は通時的観点からの捕え方である。我が国の放鷹術が江戸時代にピークに達し、その微に入り細を穿った情報はそれまでの経験と知識の結果であり、鷹書類は各

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

** 前人文系列 (Former Department of Liberal Arts and Sciences)

*** 前非常勤講師 (Former Part-time Lecturer)

**** 吉田流鷹匠 (Falconer, the Yoshida method)

藩に独自に保存されているはずである。この蘊蓄を注ぎ込んだ各鷹書も、しかしながら、重要な点は秘事秘伝として書き残さず、口伝とされているのである。残されている絵画と共に、これらは世界に誇れるものであり、海外の有識者から注目を集めているのである(講演④)。これとも関連し、第三の趣旨である共時的観点として「鷹狩」文化が世界にどのように分存し、またどのような特徴を持っているのであろうかその論点をも探った。研究者や情報が不足しているためヨーロッパや米大陸が抜け落ちているが、東アジアと西アジアを主にとりあげた。世界の「鷹狩」文化は生態環境と文化の相違から、類似した文化要素と異なるそれを明らかにし、我が国との伝統との異同をも明らかにしてくれる(講演②・③)。

翌二月十五日は、「鷹狩文化保存会」の例会を兼ねて、可児市周辺で鷹術の披露があった。シンポジウム参加者の中、堀内も所属している「供犠論」研究会の会員を主たるギャラリーとして早朝から大鷹の調教と雫の、ハトを獲物とする上げ鷹狩の実演が行われた。昨春秋の例会では「大鷹」での実猟を行い、サギ、鴨などの獲物があり、成果があったが、今回は猟期も終りに来ており、獲物もしたたかになっているため実猟はせずにもっぱら調教風景と上げ鷹の実演を主として行った。ギャラリーの方も初めての鷹との接触と鷹狩風景に興味をそそられ、それぞれの体験領域も深められたことであろう。

昼は可児市にある鷹匠料理店「味由起社」で保存会のメンバーと供犠論研究会のメンバーとの親睦を兼ねて合同の鷹匠料理の鋤

焼を馳走になった。それぞれの関心に沿って質疑応答が展開され、有意義な一時であった。

* * *

第九回分は原書三六頁中一五七頁四行目から、一六六頁三行目までである。一回の分量としては従来よりは少なめではあるが、脱稿するまでは手間がかかった。というのも今回の主題である「目形」は絵入りの文であり、我々が参考としている白黒コピーでは不明瞭な点が多々あったし、また本稿に指摘がある通り、論点とする目の部分の描き忘れがあったりしているのである。原書は手書きであるところから、この辺りは彩色で描かれているのではと推定し、堀内は東京に飛び、内閣文庫の他の原書に当たったところ、やはり多くの書で彩色が施されていることが判明。また類似の内容から我々の翻刻本の原書自体の描き忘れも明らかにあった。詳しくは稿末の大橋の「付記」論考を参照されたい。

本稿は鷹相のうち、目に視点を集中して目全体、瞳孔、虹彩の中の微妙な特徴を持つ鷹に対して、その性質、狩の実際を述べたものである。この「目形」の見方はおそらく一羽二羽を敷衍したものでなく、多くの鷹を実見してきた末の、また先人から獲得伝承されてきた経験と知識との結果から論が結せられたものである。鷹匠達のその観察眼には敬服させられる。

本稿では「鷹目形」と称しているが、他の流派では「鷹の目の内見様(の事)」としている。例えば吉田流(吉田多右衛門尉写)

では、「母鷹之目様」として十八種の目の特徴を(Ⅲ 十二頁—十四頁)、「隼之目」として二種(Ⅲ 十五頁)を載せている如くである。

本稿の部分は宇都宮流新藏人の鷹目形の伝である。著者名は明らかではないが、「宇都宮流」と「新藏人」の職名とから推定できよう。

姓名の名前二字の一方に「宗」を付すのは禰津流の家柄の命名法の一つの特徴であって、第四代から順次、宗直、宗道、敦宗、宗光の如くである。最後の宗光は鷹術の新派「大宮流」を興す。「大宮の名は諏訪の社に因むなり」(放 四十頁)、というように「大宮」は諏訪社との関係を密にしつつ、宇都宮大明神を大宮と称したのであろう。禰津宗光は、酒君流と米光流とを合わせて己の流儀「大宮流」としたとされる。吉田流も荒井流も後にこの大宮流から派生してゆく。そしてこの宗光は、その父敦宗が大宮藏人であったのに、大宮新藏人と号している(放 四十・四十八頁)。

宇都宮流は、鷹書十巻を伝え、そのいくつかは大宮新藏人宗勝が天正九年に抄したとされている(放 五十一頁)。本稿の翻刻部分は、冒頭部「宇津宮大明神之流新藏人」とあって、名前が明記されていないが、この宗勝と断定しては差し支えはなからう。すると、大宮流元祖の宗光との関係はどうなるのであろうか、上記のように「宗」の一字を名に持つこと、及び「大宮」Ⅱ「宇都宮」さらに両者とも肩書が「新藏人」としているところから極めて関係が近い者同士であろう。「宗光の子元直は、天文の頃村上

義清と戦ひて家滅亡し、弟美濃守信直と共に甲州に走りて武田信玄に據る。武田氏滅後徳川家に仕ふ。」(放 四十頁)との記述から、宗光の方は天文年間(一五三二—一五五五)には亡くなっていることが推定される。一方宗勝がこの書を記したのは天正九年とあるから一五八二年のことである。このことから宗勝は少なくとも師宗光より世代が若く、元直、信直(松鷗軒)と同世代と考えられる。今回分の締めくくりの所に「享保十一年丙午正月 菅沼定之 卷之五終」とある。享保十一年は、西暦一七二七年、江戸中期にあたる。本書が著作されたのが天正九年とすれば一四四年後の写し、ということになる。この写し手の責任者「菅沼定之」は諏訪藩の人物なのであろうか、また鷹匠としての書き手であったのか、単なる書記ないし書写家であったのか、知る由もない。さらに「卷之五終」については既に第Ⅲ節に「卷五終」と明記されていた(本稿鷹書大—(五) 参照)。ということは我々の翻刻している「鷹書(大)」の原書はとりあえず「寄せ集めの書」と解して良い。従って諏訪藩とか諏訪流とかの特定の流派の鷹書というよりは鷹狩、鷹術関係書を集めたものだろうことが分りつつある。また巻五に関しては『放鷹』に注目すべき言述がある。

「鷹を相するに眼中及脚の見様を説き、尾の見様を説きては符の変化せる類を多く集め……」(放 五十一頁)、これは宇都宮流鷹之書の内容について言及した箇所である。しかるに我々の翻刻版は、「一鷹の相形の事、一白鷹之事、一鷹の命短き事」以下七十四の項目を目次とし、別な「鷹書」に移っている。即ち宇都宮流鷹之書の内、巻五「鷹目利」のみを写していたことが分るのである。

* * *

さて、アラブ・イスラム世界の鷹狩文化の中で、本稿の主題である「鷹目形」と関連のあるものを記してみよう。もちろん、日本ほど微に入り細を穿った目形はない。目の中の虹彩(iris)の中の「しみ」は特別な語を持つわけではない。身体上に「しみ」は、傷のように一過性のものならば *radḡah* とか *khadsh* と言っし、また生来的なものならば *khai* とか *kadmah* と言っする。いずれもチャームポイント以外は美観、美相としては受け取られていないし、特徴として指摘されてもいない。「眼光鋭き鷹」のことをアラブは *lumnah* と言っする。他に「くさくさもへ眼光鋭き」動物類がいる中で、特に「鷹」に限っる点、鷹とアラブの相関の近さを示すものと言えよう。語根 *lamaha* とは「きらりと光る」「ちらりと見る」と言った一瞬の目の動きを捕らえた表現である。従っ「一瞥する」という一般義がよく用いられる。アッバース朝時代の大詩人 *Abū Nuwās* の詩集の中には *tardīyyah* と称する狩獵詩、一群の詩があるが、その一つに *al-suḡl al-lumnah* (眼光鋭き鷹) なる鷹狩の詩もある (*Diwān Abū Nuwās*, pp. 648-9, Beirut, *Dār al-Kitāb al-‘Arabī*, 1372/1953)。

もう一つ「賢き目」*‘aynun dhakīyah* なる話が、鷹に用いられてゐる。「賢き」とは「鋭敏な感覚を持つ」の意味で、そのシヤープさが強く意識される。そのような鷹は眼光となつて人の心

中を射貫くという鷹の目の形容が *dhakīyah* であり「賢明な」といふことなのである。

アラブの伝統的観相術の中、「目」の部分拾つてみよう。*al-Baladī* (d.640/1242) の著した *al-Kaṭīb li-l-Bayṣarān* (鷹術完書) より以下六例を挙げる。最後のものは随分文化的特徴を垣間見させるものとなつてゐる。

① *qalbu l-‘aynayn* 目が窪まつてゐる (p.75)。*qalbi* (pl. *qilbi*) とは「岩や土地の凹んだ部分、窪み」のことを言へ。そこにはよく水も湛えてゐる。Aswad min mā‘i l-qalbi (窪みの水ほどに黒い) との諺も生んでゐる。これが人間の体の部分だと英語の *cavity* 即ち眼窩となるわけである。眼窩がしっかりと奥まつてゐることは別の表現を持つ。

② *ghaṭīru l-‘aynayn* 目の穴、ほら穴 (p.75, 81)。*ghaṭīr* は *ghār* (pl. *aghwār, ghīrān*) と同義。*ghār* とは「ほら穴」の意味で、*kahf* よりも小形のものを言ふ。目の形がほら穴然としてゐるのが良い、とされる。太陽の直射に対しても目が深く入つてゐることは有効なる対処法であり、それは鷹を観る観察者にとつてもある種の威厳・畏敬を誘う相となつてゐる。

③ *wasī‘atu l-‘ayn* 目の広さ (p.77)。眼窩が深くても目が小さくならばその効果は半減といふことになる。目の広さは視界の広さにも繋がる。広いことは大きいことにもなり、大きい目は実機能のみか、美観をも兼ね備へることになる。

④ *raḡbu l-‘aynayn* 両目のたつたがり (p.81)。

③と同義で「広いこと」であるが、この *raḡb* は「たつたがり」

十分に、広々と」といった形容が入る広さであるから、③よりも広さのイメージがより大きいことになる。

⑤ *ṣāfiyatu l-aḥḍāq* 瞳孔の澄んでいること (p.78)。 *aḥḍāq* は *ḥadaqah* の複数形。 *ḥadaqah* とは「囲まれた、包囲された部分」で塀とか壁によつてかこわれた所を言う。同語根語の *ḥaḍiqah* は「庭」として一般語であるが、それも「かこわれた植物園」の意味である。瞳である目の黒い部分は、虹彩 (*iris*) によつて丸く囲まれていることにより、 *ḥadaqah* と呼ばれる瞳が清楚であること、これは鷹の相にとつても大切なことである。瞳孔の部分に痣が見られるような場合、アラブも「傷もの」と扱うことになろう。本稿の痣はあくまでも虹彩の部分に関する言及である。

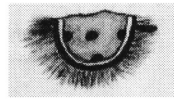
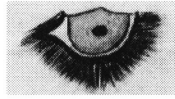
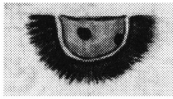
⑥ *akḥḍāru ḥamālīqī l-'aynayn* 「目蓋の内側が緑であること」 (p.81)。 *ḥamālīq* は *ḥimlāq*、 *ḥumlāq* または *humlāq* の複数形である。 *ḥimlāq* とは「目蓋 (*iaḥn*) の裏側」の意味である。なぜ「目蓋の内側」という特殊な用語が単独に存在するの

かという点、アラブ世界ではここに「コホル粉」を塗るからである。コホル粉を塗り、強い太陽光線避けるのは *ḥimlāq* を黒くするに限るというアイシャドーの果たす暑熱乾燥文化を持つているためである。人間ではここをひっくり返すと赤い色であるが、鷹の場合は「緑色」が良い、とある。緑色といつても「薄い灰色」のことで木々や林の中で見かけたり、青葉を敷いたり、止まり木とすると、その色が映えて緑色に見えることが多々あり、そのことを述べているのであろう。

* * *

なお、本稿で(放)として引用や参考としているのは『放鷹』(吉川弘文館、昭和五十八年再版)の略号である。また「宇都宮流目形」十二種には、原文にはないが「付記」とも参照を容易にするために、下段の現代語訳の部分に(第○目形)と番号を付しておいた。

- ① 宇津宮大明神 宇都宮二荒神社の神。信州の諏訪大明神と並び、祭日に賛鳥を進献する習いがあり、禁猟期においても放鷹が許された。宇都宮流の拠点をなす。
- ② 新蔵人ニシンクロウド 六位の蔵人のうち新任の者。放鷹五一頁に依れば、「大宮新蔵人宗勝が天正九年に抄したる宇都宮鷹書」があり、ここは宗勝を指すものと思われる。
- ③ 鷹目形ニタカ メカタ 視力の弱い鷹は狙が出来ない。目の形から逸物となる鷹を見分けようとするのである。
- ④ 如此ニカクノ ゴトク このように。上の絵のように。今回、本書に酷似した目形の絵入り異本が二本見つかり以下異本1(「鷹生様兄弟之事」国立公文書館蔵本。本書同系異本)、異本2(「宇津宮流鷹之書」巻五のうち鷹眼中見様之事」内閣文庫本。本書異本)として注記する。なお本書と異本1、異本2との異同については、稿末の「付記」で大橋が考察する。
- ⑤ 黒掛ケニクロガケ 黒懸け。黒斑点。黒鷹。
- ⑥ 鶴ニツル 鶴。
- ⑦ 鴟ノ頭ニオトリ・コウノトリ 鴟。頭ノ頭ニマミノ カシラ 目頭。まがしら。
- ⑧ 黒目ニクロメ 注⑤に同じ。黒鷹。黒斑点。異本2は「際能アサアラハ」(傍点編者)と「鷹」となっている。異本1、異本2共に写真の目頭に黒鷹がある。本書の絵は描き忘れたものと思われる。



69 宇津宮大明神之流新^①

蔵人鷹目形秘事口伝之事^③

一如此黒掛ケテ前後ノチリタル鷹ハ^{④⑤}

余ノ鳥ヲ差置テ鶴鴟ヲ捉ヘシ。其外ハ^{⑥⑦}

何ニテモ捉ヘシ。

一如此眉ノ頭ノ方計黒目フトク有ハ若鷹ニテモ^{⑧⑨}

鶴ニツツ捉テ後鴟鳥ヲ捉ヘシ。^⑩

一如此眉尻ニ計フトクアラハ若鷹片鳥屋迄^⑪

大鷹成モ兄鷹ノ役ラスヘシ。但鶴ハイカ、^⑫

仕ヒ主ニ依ヘシ。^{⑬⑭}

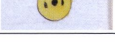
69 宇津宮大明神の流れ、

新蔵人鷹目形秘事口伝之事

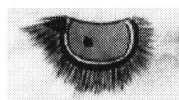
一、此の絵のように、黄目の中に黒い斑点(鷹)がかかって、目頭と目尻とに散っている鷹は、他の鳥を差し置いて、まず、鶴や鴻のような大物を捉えるだろう。其の外は、どんな鳥でも捉えるはずである。(第1目形)

一、此の絵のように、目頭の方ばかりに黒鷹が太く有る鷹は、若鷹であつても、大物の鶴を二つ三つ捉ると、その後は鴟や鳥ばかり捉るであろう。(第2目形)

一、此の絵のように、目尻にばかり、黒鷹が太く有るならば、若鷹や片鳥屋の頃(二才鷹)までは、大鷹であつても兄鷹の役目しか果せない。但し、年と共に大鷹らしく鶴が捉れるようになるかどうかは、仕主(鷹匠)に依るであろう。

異 本 2	異 本 1	本 書	
			第 1 目形
			第 2 目形
			第 3 目形
			第 4 目形
			第 5 目形
			第 6 目形
			第 7 目形
			第 8 目形
			第 9 目形
			第 10 目形
			第 11 目形
			第 12 目形

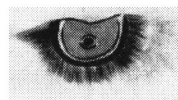
- ⑩ 異本2には、以下に「鳥屋ヲトリノ鷹也」とある。年と共にずるくなり、真面目に大物捉りをしようとしなくなる、要領のよい鷹である。
- ⑪ フト(太)クア(有)ラバ 異本2には「フトクアサアラバ」とある。
- ⑫ 兄鷹ノ役ニシヨウヨウ ノヤク 兄鷹は雄鷹。雌より体も小さく狩る力も弱い。大物は捉れない。異本2には「小鷹のヤク」。
- ⑬ 鶴ハイカ、鶴は如何。鶴が捉れるかどうか。異本1には、この前に「諸鳥や三鳥やニて大物取可申候」が入っている。三年、四年と飼っているうちには鷹匠の腕次第で、かなりの大物も捉れるようになる。但し、鶴が捉れるまてになるかどうかは疑問といったところである。異本2には、「跡鳥屋ニテ大物ヲ可取鶴ハイカン」とある。同趣である。仕ヒ主ニツカヒ ヌシ 鷹匠。
- ⑭ トンテ 飛んで。離れて。
- ⑮ 五度ニ一度 五度のうち一度。
- ⑯ 異本1には「度々に一度」、異本2には「五分」である。本書は異本1の同系異本より宇都宮流原本に近い。
- ⑰ 吹黒「吹墨」の誤写。目がにごっているさま。異本1は「ふき黒」とあるが、異本2に「吹墨」とある。本書の絵は、吹き墨をしたような黄目の真ん中にある黒目がつぶれているが、異本1・2の黒目は丸い。
- ⑱ 何モナクシテ 鷹のような斑点が何もなく。
- ⑲ スミテカワキ色 異本1には「青



一如此目ノ内ニ何モナクシテ目ノ内スミテ
カワキ色ニ不ユルハ兄鷹ノ役タルヘシ。



一如此鷹ノ黄目ノ内ニ吹黒シタル様ニ見ヘタルハ何モ捉サル也。兄鷹ノ役ニモヲトリタル鷹ナリ。



一如此上下ニトンテ有鷹ハ雁ヲ捉テハナシ
五度ニ一度モ捉鷹ト知ヘシ。

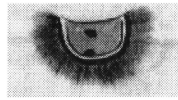
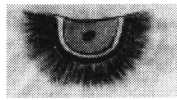
(第3目形)

一、此の絵のように、黒鷹が黒目の上下にとんで有る鷹は、雁を捉つても放してしまい、五度に一度くらいしか捉れない鷹と知るべきである。(第4目形)

一、此の絵のように、吹き墨をしたように見えているのは、何も捉らない鷹である。兄鷹ほどの役にも立たない劣った鷹である。(第5目形)

一、此の絵のように、目の内に鷹など何もなく、色自体澄んではいるが乾いた色に見えるのは、兄鷹ていどの役にしか立たない鷹であろう。(第6目形)

- みてかわき色」とある。目が乾いている鷹はまばたきが多く、狩猟力が落ちる。異本2は「常ノ鷹ノ様ナラハ大鷹ナリトモ」と異なる。
- 20 不ユル「見ユル」の誤写。異本1には「見ゆるハ」とある。
- 21 役タルヘシ 異本1には「やくにもた、ぬ也」とあり、兄鷹以下であるの意となる。本書の兄鷹程度の役にたつとは意味が少し異なってくる。
- 22 霧を袋ニ 意味不明である。異本1には、「きりをふたつに」とあり、中央にある黒目より外側へ向けて、左右に切り目(黒筋)のある絵が描かれている。異本2も、切り目が黒目の左右についた絵が描かれ、「黄目スミヤカニテ黒目内ヨリ黄目へ黒筋引通タラバ」とある。本書と異本1の関係から見れば「霧を」は「きり(切り)」の思い違いからの誤字と思われる。「袋に」は「ふたつ(ふくろ)」の誤読からの誤字と思われる。「切り目が黒目の左右に入り」であらう。
- 23 引返シタル「引通シタル」の誤写か。異本1は「引とをしたる」、異本2は「引通タラハ」とある。
- 24 カラハニチカラハ「カハ」(「フ」は衍字)。異本1は「カハ」、異本2は「万業」。
- 25 如此ノ目ニカクノゴトクノメ 絵によれば、下部に黒鷹のある目。
- 26 諸鳥屋ニモロトヤ 鳥屋で換毛期を二度過ごした鷹。三才鷹。足のミジカキ物 足の短かい鳥。鴨など。
- 27 黒目立つ 黒目が豎長になる。お



- 一如此²²霧ヲ袋ニ入内ヨリ引返シタル²³
- 目ノ鷹ハ鶴ヲ捉ヘシ。カラハサノミ²⁴
- 有マシ。是ヲモウ目ト云ナリ。
- 一如此²⁵ノ目ノ鷹ハ諸鳥屋ニテ鶴ヲ捉²⁶
- ヘシ。其前ハ足ノミジカキ物斗ヲ捉ナリ。²⁷
- 一如此只ノ時常ニ、物ヲ見ル時分黒目立ッ²⁸
- ナラハ、ヲモハシカラス。雁ハオシハナシ
- タル捉手ナルヘシ。

一、此の絵のように、切れを二つに入れ、内より両方へ引き通した目の鷹は、鶴を捉えるはずである。力はそれほど無いであろう。こういう鷹を盲目というのである。(第7目形)

一、此の絵のような目の鷹は、三才で鶴を捉るだらう。其の前は、(鴨などのような)足の短いものばかり捉る。(第8目形)

一、この絵のように、普通の時はその状態で、獲物を狙って見る時に怖がって黒目が豎て長になるならば、そのような鷹は思わしくない。雁などは一旦は捕らえるが押し放してしまうような情けない捉り手である。(第9目形)

びえた目。集中する時、黒目は小さくなる。

②⑨ 如此成目ハカクノゴトクナルメ目の状態説明が抜けている。又、この絵のような目。絵を見れば分るのであるが、この項第一条の「黒掛ケテ前後ノチリタル」と似ている。ただ、周囲に散っている斑点の数が一条には三個、本条には四個描かれている。異本1も同じである。しかし、異本2には「黄目ノアタリニシカト際能アサアラバ」と絵の説明が入り、絵そのものの、黄目の際にびつしり黒斑が巡っている。原本はこのような形であつたのではあるまいか。

③⑩ 鶴鴝計ハカクコウバカリ鶴や鴻ばかり。大型の鳥ばかり。前後ハゼンゴ 早い時期も遅い時期も。若鳥の頃から成鳥となり老鳥となるまで。異本2には「初中後一逸也」とある。

③② 推ナリ 不明。異本1には「しいなり」と表記され、異本2は「黒目横サマニアラバ」と、この部分の表記は無い。絵は、二異本ともに黒目を横長に描き、異本1の絵は少し斜めで幾らか右が本書のように尖っている。椎の実は先の尖った卵円形をしており、「椎の实のような形になっている」の意か。

③③ 黄嘴青嘴ハキハシ アオハシ嘴が黄色・青色をしているのは、雛・幼鳥である。異本1は「きはしあを鷺」、異本2は「大鷺」とある。誤写があるかもしれない。まだ弱い黄嘴大鷺の意か。ロソキ 不明。異本1は「にわき」、異本2は、全く文は異なる



③⑤ 一如此ノ目ノ鷹初メ終リ能シ雁ヲ能捉ナリ。ケ様ノ目ノ出タルヲホムルナリ。



一如此横サマニ推ナリ成ハ黄嘴青嘴鴨鳥斗捉口ソキ黄成物ナラテハ不好。



③⑥ 一如此成目ハ鶴ヲ必捉ヘシ。雁ヲ不捉鶴鴝計器用也。前後逸物タルヘシ。

一、此の絵のようである目は、鶴を必ず捉るはずである。雁を捉らず、鶴や鴻のような大物ばかり器用に捉る鷹である。初めから終りまで逸物である。

(第10目形)

一、此の絵のように、黒目が横ざまに尖っているような目をしている鷹は、黄嘴・青嘴・鴨・鳥ばかり捉る。口脇が黄色の鳥でなくては狩獵を好まない。

(第11目形)

一、此の絵のような目の鷹は、若鳥のはじめから、老鳥となる終わりまでよく、雁を捉る。このように鷹が出る目を褒めるのである。(第12目形)

が、「喰入アサクハ鴨カラス計取」と続く。「口」は「口」か「に」であろう。「ソキ」は「ワキ」の誤写と思われる。

③⑤ 如此ノ目ハカクノゴトクノメ 本書の目形写真は見にくい
が、異本1・2ともに、黒目の左右に鷹のある絵になっている。ケ様ノ目ハカヨウノメこのような目。このような鷹のなかった目。

③⑦ 目の内に：この和歌は後白河院の御製。「絵本鷹かがみ」(河鍋洞郁筆。一八六三年刊。昭和六〇年復刻)五〇頁⑤⑥に「日の内に見所のある鷹もがな鶴捉るへきと、あくそひにせん」(誤字に傍点、筆者)と、ある。鷹匠たちは、まず、目の良い鷹であってほしいと願い、目をのぞき込んで、目形を見分けたのであろう。「この目の鷹なら大物捉りになるぞ」、「いや、鶴までは無理だろう」などと鷹匠たちが口々に言い争ったのであろう。鷹匠たちの逸物鷹にかける思いと場の興奮が伝わってくる。尚、私どもの読み解いている本書と異本1は、この和歌で目形の項を閉じているが、宇津宮流鷹之書の完本かと思われる「鷹眼中見様之事」には、和歌は無く、この後、十六の目形に言及し、次に「ハヤフサノ目見様」を記している。

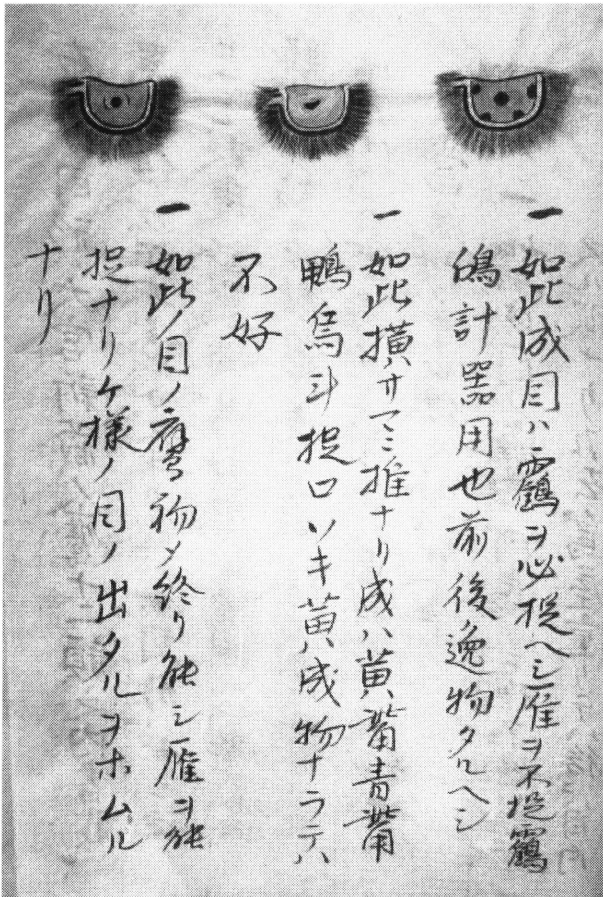
右十二ノ目形ハ大宮新藏人鷹十二顔之内書載

置申候以正本書写スナリ。於此目形ハ少モ疑

ヒナシ。数度証拠有之二付写シ置申候。此上ハ無

疑此目形ヲ以能見覺テ目利スヘキ也。

③⑨ 目の内に見所あらん鷹もかな鶴捉へきとあらそひ
そせん

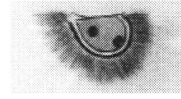
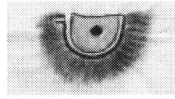
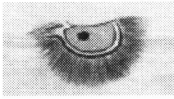


原文 161 頁 (第 10 ~ 12 目形)

右十二の目形は、大宮新藏人が、「鷹十二顔」の内に書き載せ置きました正本をもつて書き写したものである。この目形については少しも疑いがない。数度の証拠もあり、写し置きました。此の上は、疑い無く、此の目形をよく見覚えて、目を利かすべきである。

目の内に、見所のある鷹であってほしい
鶴を捉るだろうか
鷹匠たちも盛り上がるだろう

- ① 当流トウリユウ 現在私どもが読んでいるこの本を書いた人が属していた流派であり、私どもが最も知りたいところである。目形見分を得意とする宇都宮流と並べて、当流の目形見分様を記している。
- ② 如此成目カクノゴトク ナルメ 上に描かれた絵のようになっている目。黒目の斜め下になかなり大きな鷹が見える。鷹のある目の鷹は、よく見えるよく狩れる鷹である。よく光を感じる目である。但し光を感じすぎると目は緑内障になりやすい。乍去サリナガラ。そうは言っても。
- ③ 鳥屋重リテハ トヤ カサナリテハ 夏、換羽のために鳥屋ごもりをすることが重つては。年をとつていくうちには。
- ④ 目の内ヨリ出タル物 目の中から発している鋭い眼光。それは火とも光とも見える。或いは恐らく描き忘れであらう。黄目に赤い血筋が走っているのであらう、松明状に或いは稲妻状に。
- ⑤ 生出タルハ オイデタルハ 生長と共にだんだんと出てきた鷹は。黒目が上に寄っている鷹。ヲシハナシタル逸物 他を押し放す超一流の逸物。
- ⑥ 村雲ムラクモ 叢雲。むらがり立つ雲。
- ⑦ 一鳥屋ニテヒトトヤ ニテ一鳥屋で。片鳥屋で。二才くらいまで。
- ⑧ ハチ「ハチ」は「ハケ」の誤写。捌ける。無くなるの意。申候モウシ ソウロウ 申します。敬語（謙譲語）である。



⑦⑦ 当流秘事口伝之目形之事

一如此成目ノ鷹ハ何鳥ヲモ撰不嫌乱捉

スル眼ナリ。乍去鳥屋重リテハ後ニハ目ノ

黒ク成テ見エス。目クラニ成也。

一如此成目ノ鷹逸物スルナリ。此目ノ内ヨリ

出タル物タヒマツトモ云ナリ。又稲妻ノ如クニ光モ

有。其時ハ稲妻ト云ナリ。

一如此目ノ内ニ上ヨリ生出タルハ逸物スル事難シ。

雁ヨリ上物不可捉。雁モヲシハナシタル逸物

ニテハ有ヘカラス。

⑦⑦ 当流秘事口伝之目形之事

一、此の絵のようになって目になる鷹は、どんな鳥でも選び嫌わず、乱捉りする目である。そうではあるが、鳥屋を重ねて年をとっていくうちには（老鳥になると）目の内が黒くなって見え、盲目になるのである。

一、此の絵のようになる目の鷹は逸物の業をするのである。此の目の内から出ている物を松明とも言うのである。又、稲妻のように光るものもある。その時は稲妻というのである。

一、此の絵のように目の内にからだんだん生育と共にそのような状態になってきたのは、逸物となることは難しい。雁以上の大物を捉えることは出来ない。雁捉り鷹としても、超一流ではないはずである。

このような表記の混入は珍しい。自分の高い人へ講釈の筆録などが目形見分け様のマニユアルになったのであろうか。

⑫ (干)カハ(乾)キタルヤフ(様)ニ 水気が抜けて、干涸びたように。

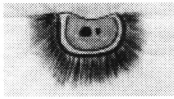
⑬ ノキ先 不明。此の条の黄目には吹き入れたような黒点が散って描かれている。この写本はすべて墨に黄色の採色のみで描かれているが、もし朱色があれば、この点は文脈から見て血走った朱の散る目に描かれたと思われる。「ノキ先」は、「朱色」か「カキ色」の誤写かもしれない。参考までに異本2の「鷹眼中見様之事」に見える一七番目の目形説明を記しておく。黄目に朱色の散る「にぢみ目」である。

「如是黄目へ朱ヲ吹入タルヤウノ目ハニチミ目ト云キツシ諸鳥屋ニテ必能一逸也ソノ前ハ何トモシレス鷹ナルヘシ」

⑭ クロ(黒)マナコ(眼)黒眼。アハ「アラバ」であろう。「ラ」が脱字。あれば。

⑮ 小物Ⅱコモノ コジケイ・コガモ・ウズラ・ヤマシギなど小型の鳥。ちなみに、大物は鶴・雁など。中物は鴨・雉・鷺などである。

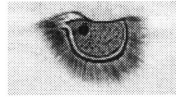
⑰ カキ色 柿色。オレンジ色。一般的に鷹の目は若鳥の時には黄色で、年と共に次第に柿色から赤色になっていく。日焼けるように早めに赤目になる。若いくせに黄色でなく柿色をしている鷹はよくない。この条、若鳥の見分け方である。せつかく手に入れた鷹であっても、将来性の無



⑮ 小物ニハヨシ。

⑮ チラサルアハ、後マテ逸物スル事難シ。但

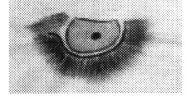
一如此目ノ内ニアサクロマナコチカクヨリテ、少モワキヘ



申候へハ若鷹諸鳥屋マテ鶴ヲハ不捉。目

次第替ル也。鳥屋重リ眼カハルニ付テ逸物スルナリ。

一如此目ノ内ノ廻リニノキ先ノ如ク血筋ノ様ニ見立



一如此目ニ村雲ノ如ク掛リタルハ一鳥屋ニて主ノ

クモリハチ申候。後、シルヤカニ曇リハケ候へハ

逸物スル也。⑫ ヒカハキタルヤフニハケ候へハ悪シ。

一、此の絵のように目に叢雲が掛かっているのは、片鳥屋をすぎるときには、主な曇りが捌け申します。その後、みずみずしくはつきりと曇りが無くなりますならば、逸物の業をするのであり、干乾いたように曇りのとれるようなのは悪い。

一、此の絵のように目の内の廻りに、手先のように血筋の様に見立て申しますならば、そういう鷹は若鷹から諸鳥屋の二・三才くらいまでは鶴を捉らない。目が次第に替ってくる。年数が重なって眼が変ってくるにつれて逸物鷹らしい狩り、鶴などの大物捉りをするようになる。

一、此の絵のように、目の内にある鷹が黒眼近くに寄っていて、少しも脇へ散っていないようであれば、いつまで飼っても大物捉りの逸物になることは難しい。但し、小型の鳥はよく捉る。

鷹は苦勞して飼う必要はないからである。

⑮ 見分ヤウ「見分ヤウ」の「ウ」が脱字。見分け様。見分け方。

⑯ 一段イイチダン 一段上の。特別の。

⑰ 秘事口伝ヒジ クデン 他流の人には知られないように秘めておかねばならないことで、本来なら文書にすると漏れる怖れがあるので、信頼できる者の間だけで口伝えに伝えられるべきこと。

⑱ 相伝仕候ソウデン ツカマツリソウロウ（他人）に伝え合います（こと）。

⑲ 不可有アルベカラズ あつてはならない。

⑳ 何レ之流ヲモ 菅沼定之の目に触れたすべての流派の目形に関する資料を一々試したのである。その中で実証的に確証を得たと思つたものののみを書載したのである。菅沼の自負が感じられる。菅沼の目に、目形に関しては「宇都宮流目形」が精度の高いものと見えたのである。その他をまとめて、菅沼の属する「当流目形」とし、何巻かある鷹之書の五巻目に書載した。さて私どもの読んでいる『鷹之書』にこれらを拾い集めた編者は何流の誰であろうか。少くとも享保十一年正月以降の編であることだけが、ここで判明したと言えよう。

㉑ 享保十一年 享保は西暦一七一六年から始まっているので、一七二七年ということになる。



一如此スミキリタル眼底マテカキ色スミタルハ

二物ナリ。底マテウルホヒシルヤカニスミタル逸

物スルナリ。此見分ヤ大事ナリ。

右七之目形ハ一段秘事口伝人々相伝仕候不可有。

度々証拠有之目形斗書載也。一段秘事也。能々秘蔵可

仕。此目形ハ何レ之流ヲモ習タメシテ其中証拠有之

計ヲ書載也。仍當流ト云也。

享保十一年丙午正月

菅沼定之

卷之五終

一、此の絵のように、澄みきっている眼底まで柿色に澄んでいる鷹は二物であり、逸物の鷹にはならない。底まで潤いみずみずしく澄んでいる鷹が逸物の狩りをするのである。此の見分け方が大事である。

右に述べた七つの目形は一段の秘事・口伝であつて、他人に伝えるようなことがあつてはならない。目形はまだいろいろあるが、ここには、度々実証された目形ばかりを書き載せた。一段の秘事である。此の目形の巻物は、よくよく秘蔵するべきである。此の目方は、何れの流派の目形をも習い試して、そのうち、実証できたものだけを書き載せたのである。よつて、何流とは言わず、当流と言つのである。

享保十一年丙午正月

菅沼定之

卷之五終り

付記

本書「宇津宮大明神之流新藏人鷹目形秘事口伝之事」の位置

——「異本1(同系本)」・「異本2(『宇津宮流鷹之書 卷五』『鷹眼中見様之事』)」を対照して——

〈はじめに〉

本書を読解するために、種々鷹の書の目形に関する資料を集めているうち、『宇津宮流鷹之書』と称する資料の中に「鷹眼中見様之事」(内閣文庫蔵本)と『鷹生様兄弟之事』の中に、平仮名本ではあるが、本書と本文が近い関係にある同系本(国立公文書館蔵)を見つけることが出来た。そこで同系本を異本1とし、『宇津宮流鷹之書』所収本を異本2とし、対照表を作ることにした。これによって本書の目形部分の性格を明らかにし、この大部的な『鷹の書』を知る一助にもなれと願う。

〈凡例〉

- 1、表は十二の項目ごとに、本書・異本1・異本2の順に並べ比較した。
- 2、異本1・異本2の本書と表記の異なる部分に傍線を、内容の異なる部分に二重傍線を付し、異本1から異本2へ順に番号を付けた。
- 3、各表の後に、番号順にその差異の意味を考えた。

〈異本1(同系)〉・〈異本2(『宇津宮流鷹之書 卷五』『鷹眼中見様之事』)対照表〉

第1目形		
捉ヘシ	如此黒掛 ^ケ テ前後ノチリタル鷹ハ余ノ鳥ヲ差置テ鸛鴣ヲ捉ヘシ其外ハ何ニテモ捉ヘシ	本書
をも取なり	如此黒目 ¹ 懸 ^ケ テ前後のちりたる鷹ハよの鳥をさし置 ² テ鸛を取又かうを取也其外 ³ 何をも取なり	異本1
	如斯ノ目 ⁴ ニアサアラハ鶴 ² 鷹ヲ能取ヘシ余ノ鳥ヲサシアキタハナシヲスヘシ	異本2

1 本書は「目」を落としているが、黒目を中心に鷹を描いている図から見て、異本1の方が古体を写している。また近い異本ではあるが、本書は片仮名文、異本1は平仮名文であり、「掛」と「懸」のように使用される文字の違いも多く、本書が直接異本1と親子関係にはないものと思われる。

2 本書と異本1は書き方を異にするが意味は同じ「鶴」と「鴻」を取るのであるが、異本2は「鶴」と「雁」であり、意味が異ってくる。異本1の「かう」は「鴻」と「雁」に表記が揺れる中間点にあった表記を示しているかもしれない(「かう」⇕「かん」⇕「鴈」)。

3 異本1の「何をも」は「何ヲモ」↓「何ニヲモ」↓「何ニテモ」

と写承されたと考えれば、本書は異本1と同じ流れの中にあり、異本1の方が古体を示している。

4 異本2にも「アサアラバ(鷹有ラバ)」の前に、「黒目カケテ前後ノチリタル」があつたものと思われる。

5 異本2の書写者は、「爪をさして捉ることに飽き、手を離してしまうだろう」の意に解していたと思われるが、「サシアキ」↑「さし置き」、「タハナシヲスヘシ」↑「他ハ何ヲモスヘシ」の異同も考えの中に入れねばならない。本書と異本1は『宇津宮流鷹之書』の抄本であり、異本2は完本であるが、『宇津宮流鷹之書』としては原本からは、かなりの書写を経た末の写本である可能性もでてくる。

第2目形		
本書	異本1	異本2
如此眉ノ頭ノ方計黒目フトク有ハ若鷹ニテ モ鷹ニツニツ捉テ後鴨鳥斗捉ヘシ	如斯まかしらの方斗黒目ふとく有ハ若鷹 ニテ鷹ニツニツ取テ後ニハ鴨鳥はかり取な り	如是目頭 ⁴ 際能アサアラハ若鷹 ² ニテモ鶴 ヲニツニツ取テ後ハ鴨計可取鳥屋ヲトリ ノ鷹也

1 「まがしら」(異本1)「目頭」(異本2)が意味からしても正しい。本書の「眉ノ頭」は間違いである。

2 「ニテ」(異本1)が文脈から見て正しい。異本2は「ニテモ」の不整合(若鳥の時でさえも鶴を二ツ三ツ取った)に気付いた人が5の部分の説明を後に加えたのだろう。

3 大意に変わりはないが、この項の重点が5の「鳥屋劣り」を言っているならば、副助詞「ニハ」(異本1)又は「ハ」(異本2)が欲しい。本書はメモ的であり、異本は書き手のニュアンスを伝えていると言える。

4 本書と異本1の「黒目太く」と異本2の「際能き鷹」との間に

接点は無い。本書と異本1は同系本であるが、異本2は祖本を異にしているものと思われる。

5「鳥屋ヲトリ」については、上記2・3に既述。

第3目形		
本書	異本1	異本2
如此眉尻ニ計フトクアラハ若鷹片鳥屋迄 大鷹成モ兄鷹ノ役ラスヘシ但鶴ハイカ、 仕と主ニ依ヘシ	如此 ¹ ましりに斗ふとく有ハ若鷹片鳥屋 ² き 成とも兄鷹のやくを可仕 ³ 候諸鳥屋ニ鳥屋 ニテ大物取可申候但鶴如何仕主 ³ よるへ し	如此 ¹ 目尻ニフトク ⁵ アサアラハ若鷹片鳥屋 ² マテ大鷹ニテモ小鷹ノヤク也 ⁶ 跡鳥屋ニテ 大物ヲ可 ⁷ 取鶴ハイカン……

1「まじり」(異本1)「目尻」(異本2)が正しい。本書の「眉尻」は「目尻」の間違いである。

2「き成とも」(異本1)は「迄大鷹成とも」からの誤字。「迄」の草書体を「き」と誤読したのであろう。「成モ」(本書)「成とも」(異本1)と「ニテモ」(異本2)の違いは、ここでも本書と異本1の同系関係を示す証となる。

3「候」は「あり」の謙讓語または丁寧語であり、本書・異本2に無い「候」が異本1に多用されていることは、異本1が鷹匠のための実用本ではなく、身分の高い人のための絵入りの指南書、又は貴人男女が座敷で絵本的に楽しんだ本である可能性を示している。

4「諸鳥屋ニ鳥屋ニテ大物取可申候」(異本1)の部分は本書にもあったものと思われる。本書か、その親本あたりの書写の際

に、「…可仕候」と「…可申候」を見間違えて、この部分(一行)を落としたものであろう。異本2の「跡」の字は「諸」の誤写か。

5「アサ」(異本2)の表記は異本2に多用され(①項4「アサアラバ」、②項4「際能アサ」など)、本書・異本1には見られない。鷹匠のための鷹の書にあった「鷹」という語は絵を見れば分かることでもあり、異本1で座敷で楽しむ絵本となった時、汚れた語を嫌った絵本作者によって外されたものと思われる。本書は絵本が再び、ある流派によって鷹の書に戻った際のものと思われる。異本1が平仮名本であり、初めに鷹頭の絵を入れ、末尾に和歌を入れてめくくっていることも傍証となる。

6「小鷹(シヨウヨウ・シヨウダカ)」は「兄鷹(シヨウヨウ・シヨウダカ)」と同音。兄鷹は大鷹より小型でもあり、ここでは兄鷹の意か。異本2が本書・異本1と書承関係が無いことの

傍証である。なお「小鷹（コタカ）」は鷗・つみ・えっさい・長元坊など小型鷹の総称であるが、狩る鳥も雲雀（ひばり）など小型の鳥ばかりで、大鷹と比較されることはない鷹である。また、「若鷹」を「小鷹」と言うこともあり（『木柴の雪』）若鷹の可能性は残る。

7「仕じ主（鷹匠）」次第で大物掬りにもなるとは、鷹匠にとつては大切なことであり、祖本となった『宇津宮流鷹之書』の本文にかかわるところであろう。異本2に無いのは、書き落としてなければ原本からの距離を思わねばならない。

第4目形		
本書	異本1	異本2
如此上下ニトシテ有鷹ハ雁ヲ捉テハナシ 五度ニ一度モ捉鷹ト知ヘシ	如此上下ニトてかく有鷹ハ鷹を取て放し 度々に一度取としるへし ²	如斯上下ニ飛テアサアラハ鷹ハトリテモ ハナスヘシ五分一トリタル鷹ト可知口傳 ⁴ 有り

1「とてかく」は「飛てかく」または「とんで」の誤写であろう。ここが「とんで」であれば、本書と異本1は「雁」と「鷹」、「捉」と「取」、「ハナシ」と「放し」という文字使いが違っているのみで前半は全くの同文である。

2「五度ニ一度」（本書）「度々に一度」（異本1）と同系本に珍らしく違いを見せている。「五分一」（異本2）の表現から見れば、異本1の本文は「五度に一度」であったと見るべきであろう。「五度」を逆に見て「度々」となったのだろうか。

3助詞の問題である。目的格を表す格助詞「ヲ」（本書・異本1）は単に目的とする対象が雁であることを示しているに過ぎないが、副助詞「ハ」（異本2）は、大物で賢い雁が取れる鷹でありながら放してしまう鷹への鷹匠のいらだちが伝ってくる。異本2は、鷹匠が書き、鷹匠が読んだ実用書の体を示している。4異本2にだけある本文「口傳有り」もまたこの本が実用書であった証である。

第5目形		
本書	異本1	異本2
如此鷹ノ黄目ノ内ニ吹黒シタル様ニ見ヘ タルハ何モ捉ザル也兄鷹ノ役ニモヲトリ タル鷹ナリ	如此の鷹き目の内ニふき黒したるやうに 見ゆるハ何もとらざる鷹なり兄鷹のやく にもおとりしふ用鷹也	如是黄目ノ内ニ吹墨 ³ シタル様ニアラハ何 鷹ニテモサノミホメスアマリ鳥ヲトルヘ カラス小鷹 ² ノ役モイタシカヌル也

1 意味段階での相違の無い項であるが、「見ヘタル」(本書)「見ゆるハ」(異本1)「アラバ」(異本2)を見れば、三本ともま
ちまちで、この中では、本書と異本1がやや近い関係(同系)
であることが分かる。

2 「兄鷹」が異本2だけ「小鷹」と表記されている。第3目形項

6 参照。意味に相違は無いが「ヲトリタル鷹ナリ」(本書)「お
とりしふ用鷹也」(異本1)「イタシカヌル也」(異本2)と三

本とも直接的な書承関係は見られず、ここでも本書と異本1が
同系であることを示している。

3 本書・異本1の「吹(ふき)黒」は「吹墨」の誤写であろう。
本書、異本1は「吹黒」となった本からの書承である。

4 「大鷹に限らず、どんな種類の鷹であつても、(黄目に吹墨を
したような鷹のある鷹は)それほど褒められるものではない。
あまり鳥を取らない」と解すべきか。異本2だけに見える。

第6目形		
本書	異本1	異本2
如此目ノ内ニ何モナクシテ目ノ内スミテカ ワキ色ニ不ウルハ兄鷹ノ役タルヘシ	如此目の内何もなくて目の内すみてか わき色に見ゆるハ大鷹 ² なりとも兄鷹 ³ のや くにもたため也	如此目ノ内ニアサモナク目ノウチ常ノ鷹 ⁵ ノ 様ナラハ大鷹 ² ナリトモ小鷹 ³ ノ役也萬口傳

1 本書の「不ウル」は「見ウル」の誤写である。

2 本書は「大鷹ナリトモ」を落としている。全体が大鷹の目形見
分け様について書かれており、意味上の差は無い。「兄鷹(小

鷹)」との対比である。

3 「兄鷹」がここでも異本2のみ「小鷹」である。また意味的に、
異本1のみが第5目形のように兄鷹以下であるとする。本書・

異本2は兄(小)鷹程度としている。本書と異本1は同系本であるが、本書の方が、片仮名本でもあり、実用書に近く、読み物としての説明語句が省かれているからであろうか。「役タルベシ」(本書)・「役也」(異本2)↓「やくにもたたぬ也」(異本1)、どちらからどちらへ向けての書承かは不明であるが、本書と異本2は用途・読み手の層が同じであった証と言える。異本1の「やくにもたたぬ也」は、前項第5目形末尾の「ふ用」(異本1)と共に実用書としては、書くまでもない説明

語句である。

4「アサ(鷹)」の語は異本2の特有語である。第1目形項4・第2目形項4・第3目形項5・第4目形項1参照。

5「スミテカワキ色」(本書)「すみてかわき色」(異本1)に対し、異本2のみ「常ノ鷹ノ様」である。

6「よろず口伝あり」である。特に変わったところの無い鷹を見分けてゆく鷹匠たちの想いと知恵の蓄積である。重い言葉である。異本2のみに見える。

第7目形		
本書	異本1	異本2
如此霧ヲ袋ニ入内ヨリ引返シタル目ノ鷹ハ鷹ヲ捉ヘシ力ヲハサノミ有マシ是ヲモウ目ト云ナリ	如此にきりをふたつに入内より両方へ引 ¹⁾ とを ²⁾ したる目の鷹ハ鷹を取ヘシ力ハさのみ有間敷候是をもうもくと云也。	如斯黄目スミヤカニテ黒目内ヨリ黄目ヘ黒筋引通タラハ鶴ハイクツモ可取但力業ヲナサハ盲目ト可成也 ³⁾

1一見して、本書が異本1と同系本であることを疑うほどの崩れを見せているが、変体仮名(異本1)の「ふたつ」を「ふくろ」と読み間違えて、「切りを二つに」を「霧ヲ袋ニ」と漢字を当てたことが分かれば、両書の原文が同じであったことも首肯される。一番大切な目の真中から両側へ黒鷹を持つ鷹は、黒目と黒い鷹が重なってしまっているため、一見視点が定まらず盲目のように見えるが実は鶴をも取るはずである。

2異本2「黒筋引通」から見ても、本書の「引返シタル」は誤写

で「引通シタル」が正しい。

3異本1「力ハさのみ」が正しく、本書「力ヲハサノミ」の「ヲ」(傍点筆者)は衍字。異本2は本書・異本1とは祖本を異にする異本であるが、この部分原本は異本2の如く「力業ヲナサハ」であった可能性は大きい。力に合わない無謀な力業をしていれば、鷹が黒目の中に寄ってしまつて、そのために盲目になることも考えられることだからである。

4異本1「有間敷候」は正しく、丁寧な言葉遣いである。この辺

り、異本1は実用書から離れた本として完成度が高い。本書は異本1の系統であるが、より崩れたものから書写したものと想われる。

5「黄目スミヤカニテ黒目内ヨリ:」といった事細かな説明が最初に入るのは異本2の特徴である。それに比べ、本書及び異本1は、目形の絵を見れば分かることを細々と述べようとはしない。絵を見せて、「如此」で済ませている。異本2も目形の絵を見せ「如此」と説明に入るのであるが、「如斯」であったり、「如是」であったり、文字違いは三様に入り乱れ、並ぶ順序にも内容との関係にも法則性は見られない。それぞれの表記を持

つ種本があったのか。「如此」「如斯」「如是」で絵を見る視点・姿勢にいくらかの差異があるのか。異本2の問題である。いずれにしても、異本2は技術を伝えようとする意志の感じられる書き方である。

6本書・異本1の「云ナリ」と異本2の「可成也」の違いは、無謀な力業をする鷹を盲目(馬鹿)と言うか、無謀な力業をしている鷹は盲目に成るかの違いである。実用書としては後者(異本2)が素直である。絵本的に、教養書になって、本書・異本1が前者の表記に定着したとするのは深読み過ぎるだろうか。

第8目形		
本書	異本1	異本2
如此ノ目ノ鷹ハ諸鳥屋ニテ鷹ヲ捉ヘシ其 前ハ足ノミジカキ物斗ヲ捉ナリ	如此目の鷹ハ諸鳥やニテ鷹を取ヘシ其外 ハ足のみしき物斗取ヘシ	如是 ² アサアラハ諸鳥屋ニテ鶴ヲ可 ¹ 取其 前ハ足ノミシカキ物計可 ³ 取是ハ其人之仕 掛次第也

1異本1だけが「其外ハ」とあり間違い。本書は異本1に近い本文を持つているが、このような誤写が出る以前のもので書写しているか、「其外ハ」では間違いであることに気付いた人が正したと考えられる。ここは鴨など足の短い中型の鳥しか狩れなかった鷹が成鳥になって鶴など足の長い大物取りとなることに言及している部分で、鷹匠など日常鷹に接している者なら間違

えようのない箇所である。

2「如是」の文字、それに続く鷹に関する表記は、異本2のみにある特徴である。

3鷹匠に対する自戒の呼びかけであり、本書・異本1は読み物としての性格上落とした部分と見られる。

第9目形		
本書	異本1	異本2
如此只ノ時常ニ物ヲ見ル時分黒目立ツナ ラハヲモハシカラス雁ハオシハナシタル 捉手ナルヘシ	如此た、の時ハ常のことくにて物を見る 時ハ黒目たつ様ならハをもハしからず鴈 ハをしはなしたる取テ成ヘシ	如此常之黒目ヨリ少堅ニ長クアラハ雁一 逸也ヲサヘテ放タルフナリトモヲクリテ 取可留也

1「常²」(本書)は「常のことくに」(異本1)のことであるらしい。普通の時は特に変わったところの無い目であるが、集中して物を見ようとする時、目相が変わることが言いたいらしいが、異本2には、その部分が「常之黒目ヨリ」と簡単に書かれる。

2「時ハ」(異本1)を「時分」(本書)と書くのは、本書を書写した人の書きぐせかも。

3「黒目立つ」(本書・異本1)が「黒目が少し堅長になる」とであると異本2によって知られる。異本2は黒目の長い絵を描いているが、本書・異本1は「常の目」が描かれており不審。また「思わしからず」と、異本2に無い文が挿入されている。

雁が捕れる鷹は余りいない。逸物の鷹である。そこに「思わしからず」とは不審である。別文の混入があるかもしれない。

4異本2の「雁一逸也」は、本書・異本1の「雁は押し離したる(他を寄せつけない)取り手成るべし」と意味に於ては全く同じであるが、書写関係で見れば余りに違いすぎる。

5「押さえて放してしまつた雁であつても、後から取り留めるのである」と異本2にのみある「雁捉りが如何に上手か」を示す説明文であるが、書写的観点から見れば、4の「押し離したる取り手」との関連を考えざるを得ない。疑問の多い項である。異本2に文脈の困乱は無い。

第10目形	
本書 如此成目ハ鷹ヲ必捉ヘシ雁ヲ不捉鷹鷄計器用也前後逸物タルヘシ	異本1 如此なる目の鷹ハ鷹をハかならず取申候²鷹をハとらず鷹かう斗きやうなり前後逸物たるへし 異本2 如是黄目ノアタリニシカト際能アサアラハ³鶴ハ鷹ヨリモ取入テ鶴⁵鷹ヲ能一逸スヘシ⁶手ヲキラハス⁷初中後一逸也

1本書には「鷹ハ」の主語が無いが、全体を通した書きぶりからすれば、本書にも「鷹ハ」の主語があったものと思われる。

2「申候」は敬語(第3目形3参照)。異本1が身分の高い人を読み手として想定していたことの傍証である。本書は異本1と同系本であるが、敬語表現は少なくなっている。

3絵を見れば分かる目形の説明が入るのが異本2の特徴である。「シカト際能アザアラバ」と説明される異本2の目形絵は黄目の外周の際にびつしりと鷹を描く。本書と異本1は黄目の外周に四個の鷹を描くのみである。

4本書・異本1が「雁を取らない」と断定的に言い放っているのに対し、異本2は「雁も取るが、鶴や鴻の方が一逸の鷹であると言う。」異本2の方が正確であり、本書・異本1は端的な印

象的な表現と言えるだろう。

5内容的差異は無いが、鶴・鴻取りを「器用(本書・異本1)」と「一逸(異本2)」であるとするのでは、表現的には全く異なる。

6異本2のみ、「手ヲキラハス」がある。鷹匠の技術の差、鷹匠と鷹との折り合いの差に関係なく鶴・鴻を取るとするのは、鷹匠の立ち場からすれば欲しい情報であろう。

7「前後」も「初中後」も、若鳥時代から老鳥の時代になるまで一生の間の意であり、内容的に差異は無い。表現面での差異は、本書・異本1と異本2の間の書承に親戚関係が薄い、もしくは無いことを示している。

第11目形	
本書 如此横サマニ推ナリ成ハ黄鸞青鸞鴨鳥斗捉口ソキ黄成物ナラテハ不好	異本1 如此横様ニ志¹いなり成ハきはし¹あを鸞鴨鳥斗取口³わきのき成物ならてハこのます 異本2 如此黒目横サマニアラハ²大鸞²ヲ能可取但⁴喰入アサクハ鴨カラス計可取⁵□ハイカン口傳

1 本書の「推ナリ」は、異本1から見れば「椎ナリ」であろう。
 2 「青鷲」(本書)、「あを鷲」(異本1)、「大鷲」(異本2)と、それぞれ相違を見せている。共に弱い武器のない鳥である。鴨に黄鷲・青鷲があるが、次に鴨が鳥と共に記されているところから見れば、本書の「黄鷲・青鷲」は異本1のように「青鷲」であるべき箇所³の誤写であろうか。「若い大鷲」の意か。
 3 本書の「口ソキ」は異本1から見れば、「口ワキ」の文字が薄

れたまま書写されたものらしい。
 4 異本2にのみある文言。「大型鳥である大鷲を狩るほどの獵欲の無い時は」と断り書きを入れている。
 5 これも異本2にのみある文言であるが、頭の一字が不明である。ルビは「カン」と読めるが雁は力のある鷹にしか取れない。このような鷹でも雁取りにする秘伝があるというのであろうか。異本2は本来の鷹書らしい書きぶりが目立つ。

第12目形		
本書	異本1	異本2
如此ノ目ノ鷹初メ終リ能シ雁ヲ能捉ナリ ケ様ノ目ノ出タルヲホムルナリ	如此の目の鷹ハ初 ² をはりよく□ ³ 鷹能取ナ りかやうに出申目 ⁴ をほめ申なり ⁵	如是前後ニ黄目ノ内ニ星アラハ鷹ヲヨク 可取鴨カラスハ押モキ——可取亦如此 ⁷ 成ニ二モツ有能々可見分□傳

1 主語の鷹に異本1は副助詞「ハ」を付している。文としての完成度が高いと言うべきか。
 2 異本1は接読助詞で二文をつないでいる。接読助詞は見にくい「而」であろうか。本書の箇条書のような文体が滑らかな和文調になっている。
 3 「ケ様ノ」(本書)と「かやうに」(異本1)の違いは次にかゝるための助詞の差にすぎないが、書きぶりは異本1の完成度が高く、本書は内容が分かれば良いといったメモのように見える。
 4・5 「出申」・「ほめ申」と異本1は丁寧語「申す」が使わ

れ、想定された読み手への配慮がされている。
 6 異本2独得の絵(目形)の説明部分である。第12目形は本文だけでは本書と異本1の群と異本2との対応があるのは、「雁をよく取る」という部分だけであるが、目形の絵を見れば、黒目の目頭側(前)、目尻側(後)に星のある形が見てとれる。
 7・8 異本2のみに見える文言。鴨・鳥を取る時の取り様や、一見して同じ目のように見えながら一逸になる鷹と二物になってしまふ鷹を見分けるのは鷹匠として最も知りたいところである。書くわけにいかない口伝もあるという。異本2は「鷹の書」

らしい目形の書であるといえる。

本書	異本 1	異本 2
右十二ノ目形ハ大宮新藏人鷹十二顔之内 書載置申候以正本書写スナリ於此目形ハ 少モ疑ヒナシ数度證據有之ニ付写シ置申 候此上ハ無疑此目形ヲ以能見覺テ目利ス ヘキ也 目の内に見所あらん鷹もかな鶴捉へき とあらそひせん	右拾式之目形ハ大宮新藏人鷹拾式顔之内 ニ書印置申正本を以書記如斯目形ニ於ハ 少も無類ニ数度せうこ有之ニ付印置申候 此上ハ無疑に此目形を見覺て鷹ノ目利可 仕事可秘々云々 目のうちに 見ところあらぬ 鷹もかな鶴取へきと あらそひにせん	〈参考〉異本 2 は、第 12 目形の後、続いて ⑬ クモ目 ⑭ ムラ目 ⑮ ノキ目 ⑯ ワ ク目 ⑰ ニチミ目 ⑱ ヨリ目 ⑲ 車目 ⑳ 目赤 ㉑ 水目 ㉒ 赤筋目 ㉓ 赤シホ 目 ㉔ 千目 ㉕ 黒アザ目 ㉖ アラシホ 目 ㉗ サクメ(セウメ) と述べ「ハヤフサの目見様」に移ってい る。

1 1-7 はほとんど同文であるが、よく見ると微妙な違いがあり、二本の性格を示している。1「書載」(本書)が「書印」(異本 1)、4「書写」(本書)が「書記」(異本 1)、7「写シ置」(本書)が「印置」(異本 1)となっており、本書が「大宮新藏人鷹十二顔」を書き写すという姿勢であるのに対し、異本 1 は書き印(記)して置くという姿勢が感じられる。

2 本書が「置申候」と、短文を並べているのに対し、異本 1

は「置申」と「正本」の修飾語として続け、単調な箇条書的な短文になることを避けている。

3 本書は文体が漢文調であるが、異本 1 は和文調である。3

「以正本」(本書)が「正本を以」(異本 1)となっていたり、5「於此目形」(本書)が「如斯目形ニ於」となっていたりする。「以」・「於」の使い方である。

6 異本 1 の「無類ニ」は「無疑シ」の誤写であろうか。この終章、最後の和歌にも誤写が多い。

8 異本1の書きぶりは丁寧で文としての完成度が高いのは第12目形1の如くである。

9・10 本書の如く「目利すべき也」とあるべきところ、「可仕事可秘々云々」と異本1らしくない鷹匠の世界が入り込んでいる。異本1にこのような「鷹の書」の書きぶりが直に表れているのはこと第3目形にあるのみで珍しい。

〈まとめ〉

この表を通して次のことが言える。

一、本書と異本1は類似性が強く、祖本を1にしているものと思われる。但し、本書は片仮名、異本1は平仮名で書かれ、同語を表記する時の文字も、「掛」と「懸」・「捉」と「取」と基本的な語に異なる文字が使われている。また、文体も、同文の文末が「ヘシ・ヘシ」であったり「ナリ・なり・也」であったりと、両書間に同一性も、法則性も見出せない。よって、両書間に書写の上での親子関係は無い。

一、本書と異本1は「申候」といった敬語が多用され、末尾には御白河上皇の和歌が載せられているなど、鷹匠のための実用本というより、身分の高い人のための趣味も兼ねた本であったと思われる。中でも異本1は冒頭の目形（第1目形）絵が重量感のある鷹の横顔の中に納まっており、第2から第12にわたる目形絵も薄墨をばかした優雅な絵で、流暢な仮名文字の美しさとも相俟って古代の説話絵巻を彷彿とするような趣きの綴じ本である。

11 本書の「あらん」が正しい。「あらむ」↓「あらん」である。異本1は「あらん」を「あらぬ」と誤写したのと思われる。

12 本書の「あらそひそ」が正しい。異本1「あらそいに」は誤写。平仮名の「そ」と「に」は形が似ている。ここは係助詞「ぞ」である。

一、しかし本書は助詞の省略が多く、助詞に心配りがあったように思われない。内容が伝わればよいといった姿勢が見られ、文体は異本1に比してメモ的である。異本1のように絵本的にも楽しめたものが、いつからか再び実用書に編入されるようになり、敬語表現が少なくなり、文芸書祖本から離れていくこうとしているのが本書に組み込まれた目形部であると思われる。

一、各項の書き初めは、本書と異本1は「如此」で統一され、絵のような目の鷹は、と絵に語らせている。異本2は「如此」・「如斯」・「如是」と三様の書き出しが順不同に使われ、絵を見れば分かることでも、「アザ」がどの様であるかなど目形の説明が入る。

一、各項の書き納めは、本書と異本1が内容を書いて終わっているのに対し、異本2は鷹匠への叱咤激励とも言える「其人仕掛次第也」・「能々可見分」などという文言や、「口伝有り」・「萬口伝」といった鷹匠同士の内緒話的文言が入り、「鷹の書」ら

しい体裁をしている。

以上、本書の「鷹目形」の部分は、鷹匠のための鷹の書というよりは、絵本化した特種な祖本から書承されたものである。一般的な鷹匠のための鷹の書には、異本2の参考に示したように、この後に、第13目形 雲目・第14目形 むら目……といった十種に余る目形があったことは『吉田流鷹書』(宮内庁書陵部蔵) などからも知られる。本書を編んだ人物は、「鷹の書」として本書を充実すべく諸流諸本を広く尋ね、十二目形では物足りず、他流の目形を見渡した上で、七目形を選び、「当流秘事口伝之目形」として補充せざるを得なかったものと思われる。

本書と異本1には共通した文言でありながら意味の通らない部分(第9目形項など)もあり、実狐から離れて文芸化すれば、それだけ本文の修復は困難になる。本書や異本1が依った本文はどのようなものだったのだろうか。『宇津宮大明神之流太宮新蔵人鷹十二顔』(傍点 大橋)の本文に出会える日を待つばかりである。

(文責 大橋)